

実践報告：JSL 進路学習の試み  
—自覚的に高校進学を考える中学生を育てるために—

小川 郁子

(北区立稲付中学校日本語適応指導教室)

0. はじめに—問題意識—
  - 0-1. JSL 生徒の進路の現状と問題点
  - 0-2. JSL カリキュラムの考え方に基づく進路学習
1. JSL 生徒にとっての進路学習の必要性
  - 1-1. 日本の社会状況がわからない
  - 1-2. 将来が見えない
  - 1-3. 「結論先延ばし」の方策としての高校進学
  - 1-4. 高校受験事情を知らない
  - 1-5. 在籍学級が提供する進路情報が理解できない
  - 1-6. 受験勉強の仕方がわからない
  - 1-7. 仲間がほしい
2. 実践の概要と生徒の様子
  - 2-1. JSL 進路学習カリキュラムの概要
    - 2-1-1. JSL 進路学習の特徴
    - 2-1-2. 年間計画
    - 2-1-3. 時間設定と遅刻
    - 2-1-4. 参加生徒
  - 2-2. 実践の状況
    - 2-2-1. 将来の夢を考える
    - 2-2-2. 受験情報提供
    - 2-2-3. 受験高校決定までの情報収集活動
    - 2-2-4. 受験勉強法・ペースメーカー
    - 2-2-5. 受験準備
    - 2-2-6. 受験の諸注意
3. 受験状況と結果
4. 3年生の受験体験を聞く会
5. JSL 進路学習を省みて
  - 5-1. この学習の成果と残された課題
  - 5-2. JSL 進路学習を実施する上のポイント

## 0. はじめに—問題意識—

### 0-1. JSL 生徒の進路の現状と問題点

JSL 生徒<sup>1</sup>にとって、高校受験は大変負担が大きい。東京都立高校の場合、中国引揚生徒については受検特別枠がある<sup>2</sup>。しかし、中国引揚以外の外国籍生徒は、問題文にルビを振る特別措置が申請できる<sup>3</sup>だけで、後は一般の日本人とまったく同様に受検<sup>4</sup>をしなければならない<sup>5</sup>。

近年、全国各地で JSL 生徒のための高校進学ガイダンスが実施されるようになってきた。母語で進学情報を提供してもらえることは、日本語の力が十分でない生徒と保護者にとって非常に画期的で、こうしたガイダンスの意義は大きい。しかし、東京は高校の数も種類も非常に多様で、受験システムも複雑である。こうしたガイダンスは通訳に時間がかかるため、ごく基本的な高校進学情報を提供するとどまり、それに参加しさえすれば、自分の進路選択ができるようになるというわけではない。筆者の前任校でも、2年生の秋のガイダンスに全員が親子で参加することを目指してきた。さらに3年に進級後は、日本語学級として3年担当教員が進路選択の支援を行ってきたが、実際には自分の判断で進路を決定できた生徒は少なかった。「センス、私のコーコどこ？」といった調子で、保護者も本人も教員頼みだったのが実情である。

今の日本社会の状況を考えるなら、JSL 生徒たちにも、高校進学を前提に支援することは妥当な判断であると考え。しかし、従来の JSL 生徒の進路

---

1 日本語を母語としない中学生を以後 JSL 生徒と記述する。JSL というのは、**Japanese as a Second Language** の略で「第二言語としての日本語」という意味である。ここで記述する JSL 生徒のほとんどは、来日3年未満の生徒である。中には日本国籍の生徒もいる。

2 中国引揚受検の資格認定は厳格である。初回来日で、小学校4年生以上に編入し、中国残留邦人と血縁関係にある3世までに限られている。

3 入国3年以内の外国籍生徒が対象で、平成20年度の入試から始まった。日本語が母語でなくても日本国籍の生徒はこの対象にならない。

4 一般に「試験を受ける」ことについて「受験」という表記を使うが、都立高校では「検査」を行うという意味の「受検」という表記を使っているので、それに従う。

5 東京都立国際高校に在京外国人枠が25名あるが、普通科ではなく国際科で、受検倍率も、合格水準も非常に高く、一般の外国人生徒が利用できる入試ではない。

指導は、卒業後の行き先を決めることだけに終始していたのではないだろうか。学級担任や地域や NPO の支援者が、その生徒の成績で合格できそうな高校を探し、選び、問い合わせ、説明会につきそい、提出書類の書き方を教え、時には内容や下書きまで作ってやって、受験のお膳立てをしていたのではないだろうか。

こうして、もしも支援者がいなかったら、卒業後の行き場を探せなかったであろう JSL 生徒たちが、高校進学を果たすようになってきた。ところが、ここまで手助けをしてもらって実現した高校生活でありながら、中退が少なからずあった。その理由はいろいろ考えられる。高校の選択肢が少ないために、近くの高校がなく通学の負担が大きいこともあろう。高校における支援体制が整っていないこともあろう。高校で学ぶための本人の日本語力や教科の知識の不足もあろう。だがもう一点、自らの進路決定に対する自覚が足りないこと、日本における高校卒業資格の意味がよくわかっていないことも関係しているのではないだろうか。中退した生徒本人に聞いてみると「そんなに高校に行きたいと思ったわけではなかった」、「やめることがそんなに大変なことだと思わなかった」、「高校はつまらないからもう行きたくない」だけなのである。合格まで熱心に後押しした支援者たちは、生徒のこの安直な中退に落胆する。

当の生徒は、高校進学に至るまでどの程度自覚的に考え行動したのだろうか。自分の進路について情報を集め、真剣に悩み、最終的に自分で納得して決めた進路になっているだろうか。結局その過程を欠いていることが安易な退学の一因につながっているのではないだろうかと考えた。

## 0-2. JSL カリキュラム<sup>6</sup> の考え方に基づく進路学習

JSL 生徒自身に主体的に進路を考えさせたいが、それを日本語学級はどんな方法で行ったらいいのか。それを考えるために、解決すべき問題が一つあり、次に進むためのヒントが一つあった。

---

<sup>6</sup> 文科省 2007 「学校教育における JSL カリキュラム中学校編」文科省の HP からダウンロードできる。

まず解決すべきは、日本語支援者はJSL生徒の進路決定にどう関わるべきかという問題である。教員は一般的に「進路指導は学級担任の仕事である」と考える。その通りであるが、学級担任に任せるだけではJSL生徒たちは結局何もわからないままであることを筆者は経験上知っている。担任が困って、日本語学級に支援を頼んできたところで介入すると、受験の「お膳立て」止まりになりがちであった。ではもっと早い段階から支援を、と考えると担任から「では、この生徒は日本語に預けますのでよろしく」となってしまう。

在籍学級で行われる進路指導が理解できないのは、日本語力の不足が原因であり、日本事情に対する知識・情報が乏しいという外国人家庭ゆえの問題である。学校行事にあたって、日本語や日本事情がわからない部分を支援し、在籍学級の教科の授業を理解する力をつけるためにJSLカリキュラムの考え方があるのだから、進路支援も同様の視点から日本語として関わるができるのではないか。そこで、進路決定までの流れにおいて、日本語力の不足と日本事情・東京の受験事情がわからないために困難がある部分を日本語学級で補い、最終的な進路指導の責任は在籍学級の担任に託し、学級担任が進路指導で困らない状態までJSL生徒の理解を引き上げておくことを日本語学級の役割にしようと考えた。

ヒントとは、文科省から平成19年3月に出された「学校教育におけるJSLカリキュラム中学校編」である。平成18年度から、筆者は前任校日本語学級でJSL理科・社会・国語・数学の実践に徐々に取り組んできた。特に日本地理・日本歴史は、文化的な共通理解の基盤を欠く上に、使用頻度の低い教科用語が多いことで理解が困難だと思われる。しかし、内容そのものはそんなに難しいものではない。都立高校全日制普通科を5教科で受検する3年生対象に、JSL社会の特別クラス授業を、教材の選択や扱いかたを手直ししながら4年間実施してきた。

その過程で、わかる日本語で教科の内容を学ぶことを通して、日本語も教科の学習能力も向上するということを実感した。日本語を学んだだけでは教科の成績は向上しない。母語で教科を学ぶことは効果的であるが、それだけでは在籍学級の授業理解に結びつかない。JSLカリキュラムの考え方なら、確かに「日本語で学ぶ力」が獲得できるのである。

JSL 進路学習の目標は、必要な知識・情報を獲得して中学校卒業後の自分の進路を切り開くと同時に、その活動を通して日本語で学ぶ力、日本語を使う力を高めていくことにおく。これなら、日本語学級が主体的に役割を担う学習カリキュラムとして位置づけることができると考えた。

## 1. JSL 生徒にとっての進路学習の必要性

進路学習を組み立てるにあたって、前任校でそれまでに見てきた JSL 生徒の3年生の様子と進路決定の経験から、JSL 生徒がおかれた状況と、彼らの進路学習はどんな点で日本人生徒と異なり、どんな進路学習をどんな方法で行うことが必要なのかを述べておきたい。

### 1-1. 日本の社会状況がわからない

日本の生徒たちは、両親をはじめとする周囲の大人やマスコミを通じて、日本社会においてステイタスや収入の高い／低い仕事を知るようになる。また、その仕事に就くための学歴や資格も情報が入る。そして、いつのまにか「高校までは行くものだ」という意識を形成するようになることが多い。同様に、JSL 生徒が生まれ育った国には、日本とはまた別の社会通念や社会事情・就労事情があるだろう。特定の職業に就くための資格要件や、特定の職業の社会的な評価・収入の高低も日本とは違うこともあるだろう。

彼らの観念は基本的には母国の社会で培われている。そして来日後は、マスコミ情報もあまり入らないことが多く、日本人の生徒なら当然知っていると思われる日本の社会通念について知らないことはいくらでもある。それに、彼らには日本語力と国籍の制約があって、日本人と同様の職業選択の自由があるとは言いきれない。彼らの外国人の親や今まで中学卒業後に進学しなかった JSL 生徒のほとんどは、同国人出身者のコミュニティから就職情報を得て、時間給のパート労働をしている者が多い。正社員という働き方を知らない JSL 生徒もいて、彼らが日本で「自分にできる仕事」としてイメージしている世界は、意外に狭いと思われる。

## 1-2. 将来が見えない

JSL 生徒は親の都合で日本に来たことで、過去の学びと現在が分断されたと同時に、現在と未来も接続できなくなっていることを感じる。つまり、将来が見えないのである。自分の将来の希望について聞くと「わからない」と答える生徒が多い。「フィリピンにいたときは医者になりたいと思っていたけど、日本じゃだめだよ、漢字わからないから。フィリピンに帰っても、もうだめだよ、英語できなくなっているから」という例のように、母国にいたときには将来の夢や希望があったが、今日本で「外国人」という立場にいると、同じ夢が日本でも実現できるのか見通しがたたない、というのが一つの典型である。

もう一つの典型は、現在の困難な状況が夢のように解消される将来像を描く生徒たちである。今までの JSL 生徒たちが挙げた「やりたい仕事」は、アメリカンプロバスケットボール選手、ヨーロッパでトップデザイナー、芸能人、歌手（複数）、ミュージシャン、プロダンサー、トップモデルなど、人の注目を集める派手な仕事を挙げる生徒が多かった。その仕事につくまでの道筋はまったく考えていないし知識もない。この2種類のどちらかが多く、将来の見通しがあまりないことが共通している。

本来、進路学習は義務教育終了後の人生の方向を考える学習であり、進路学習＝高校受験準備ではない。多くの中学校では、学活や道徳の時間を使って中学校1年から段階を踏んで進路学習を積み重ねていく。働くことの意味を考えることから始まり、身近な大人から仕事の喜び・困難などを具体的に学ぶ。さらに、職場体験を行い、どんな仕事が自分に向いているかを考える。次に、将来の自分にとっての職業の適性や、実現の可能性、職業に必要な資格や学歴を調べ、その最終段階として、各自の中学校卒業後の進路選択を行うのである。

JSL 生徒はこの学校としての進路学習カリキュラムの途中に日本の学校に編入するが、日本語がわからないのでほとんど理解も参加もできない。職場体験でも、言葉を必要としない単純作業を担当することが多い。東京都では、2年生で高校について調べ、班ごとに高校訪問をする学校が多いが、JSL 生徒は事前の情報収集に参加できず、ただ班の生徒にくっついて高校に行くだ

けで、「つまらなかった、疲れた、どこに行って何をしたのかわからない」で終わってしまうことも多かった。そんな状況で3年生に至っている。夢がもてないか、夢しか語れなくてもしかたがない状況がある。

### 1-3. 「結論先延ばし」の方策としての高校進学

この現実から考えるなら、JSL 進路学習も、日本人用のプログラム同様、最初の段階から手順を踏んで進めることが必要であろう。それによって JSL 生徒もしっかりした将来像を持てるかもしれない。小学校時代に来日した JSL 生徒が比較的しっかりした将来像を考えていることをみると、その可能性はある。しかしこれは、日本語の能力的に中学校の日本語学級の取り出し授業で扱える範囲を超えている。そこで、高校に進学し高校でゆっくり将来について考えてもらうという「結論先延ばし」が次善の策であると考ええる。

日本人でも中卒で就職し大人の中で働くことは、困難で長続きしにくい。母国の常識のままに、普通は中学を出たら働くものだと考えている JSL 生徒や、高校の合格がおぼつかなくて就職を考える JSL 生徒がいるが、日本語能力も漢字力も、そして教科学習能力も不十分なまま、15歳で社会に出ることは、彼らの将来にとってきわめてリスクが大きい。

JSL 生徒にとっての高校進学というのは、高校レベルの学習を積む目的以外に、中学卒業後もしっかりと見守ってくれる大人がいる環境で、日本語能力と学習能力を向上させ、合わせて精神面の成長を待つための時間を確保するという意味があると考えている。18～19歳になって、日本の社会事情についてもわかってから、自分で情報を収集し判断して就職を考える方が、遙かに彼らの人生設計を有利に進めることができると考える。

こうした事情から、JSL 進路学習はどの生徒も最低限の学力を獲得し、高校に進学することを前提に行うことが妥当であると考ええる。

### 1-4. 高校受験事情を知らない

高校進学事情は国によっても JSL 生徒の出身地域によってもかなり違う。高校に進学するのはごく一部の特別に優秀な生徒だけだと思っている保護者もいた。進学する高校は中学校の成績によって学校が振り分けてくれると思

っていた保護者もいた。入試で不合格になる生徒がいることを知らなかった保護者もいた。幼稚園のように自宅から近いところにみんなが行くものだと思っていた保護者もいた。

東京は都立高校が非常に多様化している上に、私立高校も膨大でそれぞれ個性がはっきりしている。東京全体の地理が頭に入っていなければ、学校名や住所を聞いてもそれがどの辺にあるどんな学校なのか、見当もつかない。日本人の生徒でも、自分の力だけで受験校を決めることはほとんど無理で、保護者や担任や学習塾の協力・支援を得て決めていく。しかし、保護者が日本の受験事情を知らないJSL生徒は、日本人以上に条件が不利である。幸いに支援者がいたとしても、支援者にすべて頼れるわけではないし、頼りきることはよくない。結局、JSL生徒自身が最低限の情報を身につけ、さらに必要な情報を自分で得るための方法を知ること、情報を得る方法を考える力を養うことが必要である。

#### 1-5. 在籍学級が提供する進路情報が理解できない

3年生の在籍学級では次々と進路に関するプリントが配られる。漢字圏の生徒なら見てある程度内容の予測ができるが、非漢字圏の生徒にとっては、内容がまったく理解できない。日本人の生徒にとっても新情報であるから、学級で配布するにあたって一通りの説明はしているはずであるが、進路特有の語彙も多く、耳で聞いても意味が分からない。

JSL生徒はそれらを日本語学級に「これなに？」と持ち込んでくる。進路希望調査票、受験勉強年間計画表、「夏期講習のご案内」、「進路説明会のお知らせ」、「都立高校を受検するみなさんへ」、「夏休み中の高校見学・体験授業の一覧」等の冊子、公開模試の案内…。たとえば、夏休みの課題に「高校を見学しレポートを書く」がよく出る。課題の意味を説明するだけでは不足で、彼らは「高校はどこにあるの？ いつ行くの？ 何を見るの？」という状態なのである。

どの学校でも進路学習で扱う項目と時期はほぼ決まっている。生徒が質問を持ち込んでから個別に対応して後手になるよりは、在籍学級の指導より早い時期に、日本語学級でやさしい日本語で予習として学んで理解しておくこ



とのほうが、合理的であろう。

#### 1-6. 受験勉強の仕方がわからない

東京では、3年生になると塾に通ったり夏期講習に参加する日本人生徒が多くなる。通信教育の受講者もかなりいる。日本人生徒はこうした機会を通じて受験勉強法について情報を得ることが多いし、ワークブックもどんどんもらう。韓国人生徒たちは、日本語習得が早いためにクラスの友達から情報を仕入れることができるのか、あるいは親の同国人ネットワークが発達しているためか、両親が日本語ができない家庭でも、塾・夏期講習・通信教育について情報をもって、自分で申し込む生徒が多かった。だが他の国出身のJSL生徒は、こうした学習機会をほとんど利用していない。経済的な負担や、保護者がそもそもそういう存在を知らなかったり、たとえ受講しても生徒の日本語力が不足ではあまり役に立たないなどの理由がある。塾の代わりに、JSL生徒のための学習支援機関をこちらが紹介して参加させることもあるが、広い都内でも数が少なく近くにはあまりない。

JSL生徒は、いずれ高校入試があることがわかっていても、何をどう勉強したらいいかわからないし、問題集も手元にあまりなく、勉強法を教えてくれる場もない。日本の本屋へ自分で出かけたことがある者はほとんどいないし、本屋がどこにあるか知らない者も多い。さらに言えば、中学校2年生以上に編入した生徒は、1年生の教科書さえもらっていないし、1年生の範囲は、まったく授業を受けたこともない状況で受験勉強をしなければならない。学校で買った問題集を開いてみても、日本語もよくわからないうえに、内容も母国で学んだ経験がないことだったりする。教えてくれる人も身近にいないのである。

さらに加えて、家庭環境が日本人生徒と違う。夜働く親に代わって家事全般をする生徒、国際結婚の連れ子では、継父と母の間に生まれた幼い弟妹の保育園のお迎えや家での世話を任されている生徒もいる。それに家が狭くて生徒が寝てから両親が帰ってきて、わきで電気をつけて夜中に食事をするなど、住宅事情が非常に悪い場合もある。こんな状況であるから、現実には3年生であっても、何も受験勉強をしていないJSL生徒も多い。「勉強って何

すればいいの?」「全然中身がわからない」「勉強の時間がない」「うちじゃうるさくて勉強できない」、そんなこと言っているうちに、夏休みが終わり、気がつく受験の日が迫ってくるのである。

### 1-7. 仲間がほしい

東京のような JSL 生徒の分散地域では、各学校の3年生には JSL 生徒は1人かせいぜい数人程度である。複数いても出身国が違ったりして、JSL 生徒が母語で相談できる仲間、思いを伝えられる友達ほとんど校内にはいないと思ってい。それぞれが孤立しているのである。フィリピン人生徒たちは教会や親同士のつながりでネットワークを形成していることが多いが、遊び仲間には留まっているように見える。日本語学級に集まる生徒たちを見ていると、同じ出身国や同じ事情で来日した生徒たちは、非常に似通った環境で、同じような問題を抱えていることが多いと感じる。そこで、同じ状況の受験生はできるだけ引き合わせて、進路について学びあい、情報交換し、精神的に支えあう場を設定すること自体を目的の一つにした。気の合う仲間を探すには集団は大きい方がいい。

これは授業をする側にも一石二鳥である。日本語学級は絶えず日本語ゼロの新規来日生徒が入級する。3年生のために個別に指導時間を確保することは困難である。今回のように20人近く3年生がいても、一度に集めてしまえば、指導時間としては週に1コマ、教員も1人ですむ。

## 2. 実践の概要と生徒の様子

ここから、JSL 進路学習の実際を報告する。筆者の前任校の日本語学級において、2009年度に実施したものである。本章ではカリキュラムの概要と生徒の様子を時間軸に沿って記述していく。

### 2-1. JSL 進路学習カリキュラムの概要

#### 2-1-1. JSL 進路学習の特徴

JSL 生徒の現状と、中学校の中に設置された日本語学級としての進路指導

の関わり方と、JSL カリキュラムの考え方とを一体化して、JSL 進路学習カリキュラムを作成した。その特徴は次の通りである。

1. 在籍学級と同様の内容を、在籍校の取り組みに先行して扱う。
2. 全員が高校に進学することを前提とした内容で行う。
3. 理解できるレベルのやさしい日本語で行う。
4. JSL 生徒にとって必要な情報や理解不十分な内容をつけ加える。
5. JSL 生徒の実態に合った受験学習方法・学習内容の支援を考える。
6. 進路決定に必要な情報を自ら収集して日本語で理解する。
7. 進路学習としての内容理解と、日本語力の向上の両方を目標とする
8. 個別支援ではなく、ピア・ラーニングの考え方で、仲間同士で協力して進めるワークショップ型授業として行う。
9. 自分で志望校を選択・決定する。
10. 進学をめざす JSL 生徒の仲間として、精神的に支えあいともに育つ。
11. 進路指導の責任は担任であり、JSL 生徒が在籍学級の指導に参加できるよう、生徒の後方支援を行う。必要に応じ担任と連携する。

## 2-1-2. 年間計画

週1回1時間で、4月から12月まで。①進路情報提供、②各自の情報収集、③受験準備、④受験学習計画、以上の4つの領域の内容を、その時期に応じて年間計画に組み込んだ。

1学期は、主に①進路情報提供を行った。次に②各自の情報収集につなげる。ゴールデンウィーク・定期考査・夏休み・冬休みの前に④受験学習計画をはさむ。②の情報収集は内容が多く、最終は12月の三者面談で志望校を決定するまで続ける。並行して、10月から③受験準備を始める。これは授業終了後の入試直前まで続ける。最後に12月に再度、受験についての①情報提供を行う。実際の実施結果は、資料1の通りである。

### 2-1-3. 時間設定と遅刻

時間設定について述べる。本日本語学級は、かつては在籍拠点校方式<sup>7</sup>だったが、現在は他校生徒を通級方式で受け入れ、地域のセンター校<sup>8</sup>の性格をもつ。3年生は調査書に配慮し、成績評価を行う教科の授業時間には極力取り出しをしないようにしている。2009年度は、区内全中学校の授業が学活と総合になる金曜午後に全員を集めることにした。午後3時から4時をJSL進路学習、その後の4時から5時までを都立高校全日制普通科を受検する生徒のためのJSL社会の時間(1・2年の範囲の地理・歴史)<sup>9</sup>にして、この2つの授業を筆者が担当した。学習は4月から12月の最後の授業までで、2010年1月以降は、支援が必要な生徒は、個別に申し込んで通級する方法にした。

各在籍校で、金曜5時間目の学活の時間に何をするかは時期によって異なる。JSL生徒は学活には出ないことを前提に、できるなら給食後にすぐ日本語学級に通級させるよう在籍学級の担任にお願いしたが、それも状況による。特に1学期は修学旅行の事前学習を行っている学校が多かったので、学活に出てから通級する生徒は、3時の開始に間に合わなかった。平成21年度は、新型インフルエンザの流行により、修学旅行や合唱コンクールなどの学校行事が次々に延期・時期変更や中止になり、3時集合の原則はとうとう最後まで徹底できなかった。担任の配慮で、在籍学級の5時間目の授業に出ないで通級する生徒は2時ごろに到着していた。この時間差が最後まで続いた。授業は3時から、いる生徒だけで開始し、その後遅刻者が続々到着する状況だった。3時に間に合わなかった生徒は、JSL社会の授業終了の5時以降に、その日の進路学習のポイントと課題を確認したが、JSL社会に参加しない生徒は、遅刻してJSL進路学習に参加し、4時には仲間とともに帰ってしまって、内容不徹底な部分もあった。出席はとったが、到着時刻がまちまちなため、誰がどの内容について理解不十分か、はっきりしない。

---

<sup>7</sup> JSL生徒の居住地の中学校でなく、遠方でも日本語学級設置中学校に編入する方式。

<sup>8</sup> JSL生徒は自分の居住地の中学校に編入し、日本語の学習時間だけ日本語学級設置校に出かける方式。

<sup>9</sup> JSL社会は、進路学習より一足早く春休みからスタートし、受験に対する意識付けを行った。

#### 2-1-4. 参加生徒

JSL 進路学習は、日本語学級の3年生向けの授業なので、対象生徒は原則として、中学校入学以降に来日して日本語学級で学習した／している生徒で、日本で高校進学予定の生徒である。この原則にあてはまる生徒は12人おり、自校在籍生徒が4名、他校通級生徒が8名であった。ただ、このうち1名は日本語学習継続中で、その時間の中で進路支援を行ったので、JSL 進路学習の時間には呼ばなかった。また結果的に進路が高校でなかった生徒もいる。この他に、後半に原則からははずれるフィリピンに関わる生徒<sup>10</sup>5人が加わった。卒業後に帰国予定だったが帰国をやめて受検することにした生徒(2人)、小学校時に来日したり日本生まれで、日本語学級では勉強していないが、進路事情がわからない生徒(3人)である。フィリピンに関わる生徒たちは互いにつながりが強くなり、在籍校が違っても、JSL 進路学習の時間においてもいなくても、たえず携帯メールなどで連絡を取り合っており、一緒に高校見学に出かけるなどしていたので、この授業とその周辺で進路決定を行った5人を含めた17人の生徒を対象として記述する。

これらの生徒の属性を分類すると内訳は、次の通りである。

出身国別 : 中国7名、フィリピン9名、韓国1名

性別 : 男子6名、女子11名

滞日期間別 : 滞日1~2年 : 6名、滞日2~3年 : 7名、

滞日3年以上 : 3名、日本生まれ : 1名

在籍校別 : 自校在籍生徒 : 8名

他校通級生徒 : 7校9名。2校は生徒が2名在籍(国の異なる男女の組み合わせ)、その他の5校は1校1名である。

#### 2-2. 実践の状況

##### 2-2-1. 将来の夢を考える

このJSL 進路学習は、高校進学を前提に行った。それでも、彼ら自身が高校進学の可能性を納得しなければ、進学に向けての精神的準備ができない。

---

<sup>10</sup> 「フィリピンに関わる生徒」と表現したのは、フィリピン国籍とは限らず、フィリピンの言語が母語とも限らないが、フィリピン出身の母親と生活する生徒である。

そのためにはやはり、将来の自分を想像するところから始めることが必要だと考え、4月は、「10年後の私」「40年後の私」という2枚のワークシートを埋めるところから出発した（資料2）。10年後のあなたは、どこに住んでいる？ 何をしている？ だれとどんな生活をしている？ そういう想像をして、「最高の自分の姿」を描き出した。

このワークシートは、「このままいけば、これからも自分は、どこかでずっと生きているのだ、だんだんに年をとっていくのだ」という当然の事実に変更して気付かせ、「10年後、40年後にできるだけ楽しくやりがいのある人生を送っている自分でいたい」、「貧乏／辛い／寂しい／悲しい生活をするようになってしまうのはいやだ」という意識をしっかりと持つことまでを目標とした。そして、「今から自分の将来に向かってステップを踏み出すのが、高校進学」という位置づけを与えた。

ここまでのタスクを順調に進めて時間的に余裕のあった生徒には、さらに職業適性テスト、性格診断テストなどを行い、将来の希望は自分に適したものであるかも検討した。

## 2-2-2. 受験情報提供

続いて、1学期の前半は主に受験情報を提供した。やさしい日本語で内容を実際に理解できるまで繰り返し伝えた。原則的な流れは次の通り。まず教員が説明し、わからないことは自由に質問する。それに対しわかる生徒が日本語で説明し、まだ不十分なところは他の生徒が補足する。まだ不十分なら、教員が補足する。日本語ではだめなら、できる生徒が通訳して母語も使って理解させる。情報は全員が共有できるようにした。

2年生の秋にはほぼ全員が、東京都でNPOが主催する「日本語を母語としない親子のための高校進学ガイダンス」に参加したはずだが、「高校の試験はいつあるの？ 7月？」「高校の試験はどこでやるの？ 自分の中学校？」「都立高校のテストの問題は学校ごとに全部違うの？」「テストで何点とったら合格するの？」など、日本人が基本以前と思うような質問が生徒たちからたくさん提出された。彼らの知識の実態はこの程度であることを思い知らされた気がする。

遅刻者も多かったので、わからないことはいつでも質問できる雰囲気大切にしました。上記のような質問も毎回のように繰り返されたが、さらに、その後、少しずつ説明をしていった内容で、「偏差値ってなに?」「試験は何教科?」「1年の勉強も出るの?」「推薦ってなに?」「単位制高校ってなに?」なども、なかなか定着せずくり返し質問が出た。これらも出席していた生徒に次々説明させる。こうした方法で、どのくらい生徒たちが正しく情報を獲得したかをこちらも確認した。知っている情報を他の生徒に正しく説明するのは日本語として非常に高度な活動である。情報の内容とその説明方法もそのつど指摘して、よりよい方法を求めた。ついでに日本語の文法や表現、漢字表記や発音の確認も行った<sup>11</sup>。情報提供を行った項目は次の通り。

1. 今年1年間の、高校入学までの流れ
2. 進路希望調査の書き方
3. 学歴と職業、アルバイトと正社員の違い
4. 受験勉強とは何をどうすることなのか
4. 学習計画表の作り方、計画がうまく進まないときの対処のしかた
6. 奨学金とは
7. 高校の種類
8. 都立高校入試の基本情報、推薦入試とは何か
9. 入試の総合得点の算出方法、調査書点の算出方法、偏差値とは
10. 実力テストとは
11. 受験案内の本の見方、調べ方、使い方
12. 進路説明会の資料の読み取り
13. 高校の説明会の情報提供とその情報の活かし方
14. 三者面談で話すこと、面談の前に相談しておくこと

### 2-2-3. 受験高校決定までの情報収集活動

- 1 学期の後半からの主な活動は、受験高校決定までに必要な情報を自分で

---

<sup>11</sup> 最も繰り返したのは「ココ」ではなく「コーコー（高校）」という長音の確認!

収集し、受験校を決めることである。具体的な手順は次の通り。

- 1) 2年3学期の評定をもとに、調査書得点を計算する。次に、3年1学期中間テストか第1回実力テストの得点をもとに、入試得点の予想を出す。この二つから入試総合得点の予想を計算する。(分数や小数の計算、比重計算がわからないなどの数学の問題も頻出。手計算ではミスをするので電卓を配付し、母語別グループで協力する)
- 2) 『高校受験案内』の本に出ている予想合格点や偏差値の表、合格圏図の見方を知る(これで自分はどのあたりの高校に合格できるのかを初めて知る)
- 3) 進学希望の高校の科(普通科・職業科・その他の科)に合わせて、自分の入試総合予想得点より高めの高校、ちょうど合格できるレベルの高校、成績が今後下がっても合格できそうな高校を選び出す。その高校の住所を手掛かりに、地図で大体の位置を調べ、通学可能な学校をしぼる。(この段階で、高校の名前の漢字が読めない、住所が読めない、地図で探せない、などの問題が頻発する)
- 4) 通学可能と判断した高校について情報収集する。何種類かの『高校受験案内』の本を読む、インターネットで高校のHPを調べ、その高校の特徴を書き出す。(この段階で、また単位制ってなに? 総合科ってなに? 授業の中身がわからないなどの疑問が頻発する)
- 5) 受験候補高校の説明会・体験授業・学校公開・運動会・文化祭の日程を調べる。自宅からの通学経路、最寄り駅からの道順を調べる。
- 6) 以上のデータを「私の受検計画」資料3の一覧表にまとめる(高校の住所、電話番号、通学経路、60%合格ラインの入試得点・調査書点・総合点・偏差値、学校の特徴、一次入試教科、推薦入試の内容、説明会・体験入学・学校公開の日程、その他)
- 7) 調べてわからないことは自分で電話をかけて問い合わせる(体験入学の申し込み、上履き持参か、など。電話をかける前に、筆者が高校の事務室役をして、電話のかけ方の練習もする。電話は教室のすぐ横にあり、練習してできるようになったら、すぐその場でかけさせた。みんなかたずをのんで、様子を見守っていた。)



- 8) 高校1校につき1枚ずつ「高校見学のまとめ」用紙資料4を準備して、事前にわかるデータを記入する。
- 9) 高校見学に行く。(説明会・体験入学・学校公開等。ほとんどが9～11月の土曜日)。「高校見学のまとめ」用紙をもとに、高校の情報を調べる(自宅からの通学経路と通学のしやすさ、学校周辺の環境、授業の難易度、生徒の授業態度、学校の施設の充実度、部活の種類、学校の雰囲気など)。見学したら、結果を「高校見学のまとめ」用紙に記入し、次の授業で提出する。高校見学するたびに作成し提出する。

このやり方を理解させるために、実習として1学期のうちにフィリピン人生徒たちを連れて三部制定時制高校の学校公開に出かけ、実際に見学後にみんなで「高校見学のまとめ」用紙に記入させた。教員側も、生徒のその高校に対する判断を知っておくために、この報告用紙をコピーを取って手元に置くことにした。在籍の生徒は、毎日昼休みに会うことができるので、見学の翌週には様子を話しに來たり、用紙もすぐに回収できたが、通級生徒の場合は、金曜の進路学習の時間にしか会わないので、生徒も記入忘れや持参忘れで徹底はできなかった。

- 10) 見学した結果、通学が不便・学習内容が自分の希望と違った・学校の雰囲気が自分に合わない等、受験する気持ちがなくなった高校は削除し、受験希望校が不足ならデータ検索からやり直して補充する。
- 11) 新しい成績データが出るたびに入試予想得点の計算をやり直す。3年1学期の評定<sup>12</sup>、第2・3・4回目の実力テスト、公開模試の結果等でデータを更新して、受験候補高校の上方修正、下方修正を行う。

生徒たちは来日後の時間が短いので、日本語の力も伸びつつあるし、本気で勉強を始めると、最初は教科の成績がどんどん上がる生徒もいる。一方、中間・期末考査の範囲に、1・2年の復習問題を加える教科担当の先生も多くなる。強制的に復習させるためであるが、JSL生徒たちは、3年の学習内容は在籍学級の授業についていくようになるが、自分の来日前に授業が終わってしまったか、日本語が理解できない時期に授業が行われた

---

<sup>12</sup> 前任校の地域は、2009年度当時3学期制であった。

1・2年の理科・社会の範囲は、結局自分一人で勉強するしかなくきわめて負担が大きい。そのために、3年1・2学期の内申成績を上げるのもかなりの困難がある。むしろ日本人生徒が本気で勉強を始めると、相対的な位置は下がってくることも多い。さらに実力テストの出題範囲は3年間の内容なので、学校の定期考査に比べて JSL 生徒の成績評価は低くなりやすい。こうした不利な条件があつて、努力しても思うような成績の上昇が確かめられず、やる気が持続しにくいのが現実である。だが JSL 生徒同士なら条件は同じである。新しいテスト結果を入力して友達が志望校を上方修正するのを見れば、「自分ももっと得点をあげたい」という気持ちが迫ってくる。生徒たちの学習意欲は、こうして一緒に受験校を決める過程を共有している3年生の仲間を支えることができた。

12) 高校見学と志望校修正の過程で、家族の人と常に話し合いを続ける。特に私立高校を併願優遇<sup>13</sup>で受験できるか、奨学金を申請する<sup>14</sup>か、よく相談する。(今回の生徒たちは1学期の段階で、私立高校を受験できるという家庭はなかった。本人たちも「いない」というので、私立高校についてはまったく説明しなかった。2学期になって、私立を受験できる生徒が1人出てきたので、個別指導で受験高校を探した)

13) 在籍中学校の「進路希望調査」(各校で時期が異なる)には、各自のその段階での受験希望校を記入させた。11月、12月の三者面談で、担任にどう話すか、自分の考えをまとめ、家の人とよく話し合っておく。

2学期を通して膨大な時間をかけて説明と作業を継続した結果、年に3～5回行われる進路希望調査では、JSL 生徒自身が志望校を記入し、その希望校はほぼ妥当な線に収まったということができ、各生徒の担任から日本語学級のほうに問い合わせや再検討の相談はなかった)

14) 滞日期間の長い生徒たちの参加。具体的な志望校を決める段階になって、今までこの授業に参加していなかった生徒やその担任から相談が来た。初

---

<sup>13</sup> 第一希望は国公立高校もしくは別の私立高校であるが、その高校が不合格だった場合には必ず入学するという条件で受験する私立高校入試。

<sup>14</sup> 奨学金は将来返済が必要なので、日本にずっといるという決心ができない生徒は申請しない傾向がある。継父に奨学金の申請を頼むことを遠慮する生徒もいる。

めに述べた5人のフィリピンにつながる生徒たちである。この生徒たちは日本語はわかるが、在籍学級での進路指導では、既有知識としての受験情報が欠けていることや、保護者が日本事情にうといために、自分の志望校を決めることができないでいた。受験制度を知らずに単に部活のスポーツが強い高校の名前を書いていた生徒や、私立併願のことがわからない生徒もいた。彼らも作業グループに参加させ、前からJSL進路学習に参加している生徒たちに説明させて、同じように受験校選びの作業をやって、高校の説明会に行かせた。タガログ語の力が低い生徒には、フィリピンの生徒たちは日本語で説明しなければならなかった。

受験高校を決めるまでの生徒たちの様子をまとめて述べる。何種類もの作業は、意味を理解してどんどん進めた生徒もいたが、たいへんな手間と時間がかかった生徒もいた。授業参加生徒はいつも全員ではなかったが、10人は必ずいて、主に同国人の生徒たちで互いに教えあい、助けながら進めた。受験案内の本の漢字が読めないときにも、最初はすぐに教員に聞いてきた。最も簡便な方法だがそれには応じない。「読めない漢字があったらどうするか」を考えさせ、みんなで工夫して解決させた。中国人で漢字がよくわかる生徒に聞く、電子辞書の手書き入力で読みを探す、など生徒たちは工夫していた。

入試予想合計得点を計算して、自分がどの高校に合格できるかがわかる瞬間が、やはり緊張だった。最初は、自分の成績の部分を筆箱で隠しながら予想得点計算をしていた生徒たちも、結果が出ると人のを見たくなり、その交換条件で自分の成績も見せることになって、結局みんなで見せ合っていた。「私もあと～点上がれば〇〇さんと同じ高校に行けるんだ」とか、「受かるのここだけなんだけど、ウチこの高校ヤダ、行きたくない、どうしよう」などの声も聞こえた。生徒たちは、在籍学級の友達志望校なども聞いていた。だいたい自分は誰と同じ高校に行けそうか考えていたのに、それを大きくはずれる結果だったためだ。現状では合格できる高校がまったくないことが明らかになった生徒もいて、「え～っ、ウソ～！」と大声を上げていた。そういうときに仲間から、「そうだよ、あんたやっとなかった？」という率直な声もあがったし、「がんばろうよ、2学期にがんばれば、きっとどっかあるよ」と

励ましあう姿も見られた。

高校説明会は、受験の可能性がなくても、同じ国の仲間みんなの高校へぞろぞろ一緒に見学に出掛けて行った。初めてのところに電車を乗り継いで出かけるのは、日本語の力が足りない彼らにはとても勇気のいることである。そうした行動も「みんなでやれば怖くない」の精神で慣れていったようだ。1年上の先輩を知っている生徒は、自分で先輩に連絡をとって案内してもらっていた。前年までの生徒たちは、ほとんど一人では説明会に行けず、ボランティア団体の大学生につきそってもらったり、教員が連れて行ったり、説明会に参加する日本人生徒に誘ってもらったりしていた。今回は、彼ら自身が協力し合うことで、東京の交通事情に詳しくなっていたし、自分が受験する高校以外も見学を重ねたことで、高校を見る目もより確かになっていったと言えるだろう。修学旅行が2学期に延期になるなど、10月を過ぎても受験に本腰を入れる雰囲気はなかなか整わず、土曜日ごとに説明会や文化祭に繰り出していることに次第に筆者の方が心配になった。

高校説明会には、保護者も同行するよう早くから話していた。しかしほとんどの親は一緒に行かなかった。仕事がある、説明を聞いても日本語がわからない、日本の高校のことは何もわからない、行くのは子どもだから自分が見てもしょうがない、などがその理由だったようだ。しかしこれは生徒たちの言葉で、もしかすると生徒が親を誘っていなかったのかもしれない。国際結婚の家庭では継父のみならず、長年離れていた実母との関係もよくない生徒が少なからずいる。友達とみんなで行けるほうがよほど楽しかったのかもしれない。

もちろん失敗もあった。とうとう高校の場所がわからなくて行き着くことができなかった生徒がいた。高校までの経路の調べ方が不十分で、片道2時間近くかかった生徒もいた。受験業者が冊子で提供した説明会開始時刻が間違っていて、せっかく時間の余裕をもって着いたつもりが、ちょうど説明が終わったところでブラスバンドの演奏を聴いただけで帰ってきた、という報告もあった。他にもまだあったかもしれないが、こうした報告をした生徒は、「失敗したけれど、私はちゃんと行こうとしたんだよ、わかって」ということを筆者に伝えたかったのだろう。

こうしていくつもの高校を見学する中で、生徒たちは「この高校は自分にとってどうか」を判断する力がついてきた。人気があるレベルの高い都立高校を見学して、「自由が特徴の学校だけど、あの感じは自由すぎる。私に合わない」と受験リストからはずした生徒がいた。併願優遇を考えて見に行ったら私立を「今まで見てきた都立高校のどこよりもいい感じだった。それにこんな授業がある～～、だから都立をやめて初めからあの学校にしたいな。お父さんに話してみる」と言って私立単願受験に切り替えた生徒がいた。小学校時代に来日した生徒を面倒見てほしいと担任から頼まれた。姉が受験経験があるので、支援はいらないと思っていた生徒であるが、実際には何をどうするかわかっていなかった。高校の探し方がわかったら、理数に重点をおく高校に親と一緒に見学に行ってきた。担任は別の見解をもっていたが、本人は「僕は自分で見て考えて決めました。ここにいきたいです。僕の将来の希望にあってます」と、自分の考えを貫いて受験した。将来警察の仕事をしたという生徒は、人権教育に強い学校で朝鮮語を勉強できて合気道の部活があるから、ここが私にぴったり、と志望校を決めてゆるがなかった。幼稚園から使ってきた英語のレベルを維持して英語で仕事ができる看護師を目指すという生徒は、英語の成績を受験に有利に生かす高校を選んだ。英語の成績が高いため英語推薦で悠々合格できるレベルだったが、「落ちたらどうしよう」と猛勉強を続け、一般入試を受けたとしても上位合格できただろうところまで得点をあげた。

心配な生徒もいた。母国では成績は上位だったという。しかし、こつこつ努力をすることが苦手で、やることが雑でケアレスミスが多く、得点に結びつかない。学校の提出物もいかげんだが、そのことが調査書得点でどれほどの損失になっているか本人はなかなか自覚できない。「大丈夫、オレ絶対いい点取れる」と合格可能性があまりない高校ばかりを選んでいった。成績だけ見て志望校を下方修正させては本人がその後努力する意欲を失う危険性があると思い、入試ぎりぎりの時期まで様子を見ることにした。

高望みの志望校を変えない生徒がもう一人いた。高校の内容よりレベルにこだわっていた。再考を促しても「うるさいよ、先生、関係ないでしょ、ウチが決める」と突っぱねる。彼女の性格はわかっている、他の生徒もあまり

口をはさまない。入試総合得点の予想を出す作業の中で、通知票の評定を1つあげるとは、入試の当日の得点で何点分の得点に相当するかを計算した生徒がいた。この「発見」はヒットで、自分の志望高校に合格するためには、通知票の評定をあといくつ上げて、テストのどの教科であと何点アップさせればいいのかを計算する生徒も出てきた。この「発見」をした生徒が、「じゃあ、計算してみようよ」と彼女の得点をもとに試算した。今の評定を2学期の通知票でどこまであげられるか。数学と国語はもう上がらないけど、英語は1つ上げられる…、と本人はよく自分の状況がわかっていた。その結果、自分として最大限の努力をして目一杯評定を上げて、その高校の合格可能性60%に届かない、という結果が出たとき、大きなため息をついたが、志望校を変えた。

家庭の生活が苦しく、自分が働いて家族の生活を支えなければならないからと、最初から夜間定時制に行く決めていた生徒もいた。姉も1年前同じ選択をしていた。今まで非常に努力をして、非漢字圏出身でありながらほとんど日本人生徒と同様のレベルまで学習言語能力をつけてきた。正社員になる道、生涯賃金の話、子ども手当や高校授業料無料化の方向、奨学金もある、と担任とともに全日制高校に行ける道はあることを話した。初めから自分の将来の夢を押し殺して「家族のために」という人生選択をする生徒がフィリピン出身生徒にはよくある。こうした出身国の文化の中で育まれた生き方や価値観をもつ生徒に、日本流の考え方を押し付けてはいけなと考え、生徒本人の中でよく考えて最終的に納得できる結論を出すように話した。最後に「私は今までがんばってきた。自分の夢をあきらめたくない。お金のことはアルバイトでがんばるから、昼間の高校に行きたい」と両親を説得した。

#### 2-2-4. 受験勉強法・ペースメーカー

この授業のもう一つの重要な役割は、勉強のしかたを自分で考え、身につけることである。1学期にはまず、受験勉強とは何をする事なのか、具体的な説明から入った。ゴールデンウィーク前には、休みの間の勉強プランの作り方を考えた。同様に、定期考査・実力テストの前の勉強・テスト後の復習の方法、夏休みの生活プランと学習内容の計画等、「今の時期は何をどのく

「らいやればいいのか」について、いくつかのプランを示しながら、計画的に勉強することを常に伝え続けた。**資料5**

生徒の家庭環境については述べたが、下校後も両親が不在で生活時間の管理をすべて自分でしなければならない生徒、家事全般を担う生徒、幼い弟・妹の世話をする生徒などは、それぞれの生活に合わせた計画が必要である。総じて、勉強に割ける時間が限られている生徒が多かった。

入試の過去問題集の本は必ず買って全部やりなさいと言ったが、彼らは本屋がどこにあるか知らない。買いに行くときも仲間で誘い合って一緒に行っていた。1年上の先輩に連絡をとって、使わなかった受験用の参考書や問題集をゆずってもらった生徒がいた。これにヒントを得て、彼らが卒業するときには、教科書・教材・問題集を譲ってもらい、次の年度の3年生にまわすことにした。それでも余ったので、地域でJSL生徒の学習支援をしてくださる方々にも分けることができた。

JSL 生徒にとって日本語で受験勉強を続けるというのは、非常に困難で精神的に苦しいことである。「やらなくちゃと思うと反対にどんどんやりたくなくなっちゃう」など、気持の問題を訴える場面も多々あった。自分で時間を管理する方法、精神的なコントロールのしかたについても、生徒同士で情報交換をさせた。似たような家庭環境の生徒同士が、精神的に励まし合うことの意味は大きく、同時にライバルであることも重要である。しっかり勉強している友達の姿を見たら、「自分もやらなくちゃ」「自分にもできるはず」という気持ちになることを期待した。

## 2-2-5. 受験準備

10月からは受験準備に入った。具体的には、以下に説明する5項目である。金曜の進路学習の時間だけではおさまりきらず、他の時間を設定したり、学校外の団体を紹介したものもある。

### 1) 作文補習

入試に作文のある高校を受験する2名の生徒のために、水曜放課後に時間を設けた。自分が受験する学校の過去10年分のテーマについて作文を書いた。

## 2) 学習補充

- ・月曜放課後：数学クラス<sup>15</sup> メンバーの移動はあったが、5～6名が参加した。日本語学級の教員2名で交代に担当した。数学の入試問題の日本語をきちんと読み解き、パターンをつかみ、類題をこなして得点することを目標とする。証明、二次関数、確率などをみんなでやった。
- ・水曜放課後：学校の近くに住む区日本語指導員の方が自宅を開放し、ボランティア講師を依頼して、受験学習支援教室を開いてくださった。中国の4人が参加した。
- ・学校外：ボランティア団体による学習支援教室を紹介し、学校がない土日の勉強の支援をしてもらった。

## 3) 「面接想定問答プリント」

面接試験の比重が高い推薦入試に対応するため、面接で想定される質問に答えを考えておくことは非常に重要である。面接想定問答回答集のたぐいは、在籍学級でも配付されることが多いが、JSL生徒たちは、日本語の力が不十分で、この「回答」を完成させるのに日本人生徒の10倍の時間がかかる。本名を使用する生徒は外国につながるものがすぐわかるので、外国から来た事情や日本語学習について面接で聞かれる可能性がある。日本名を使用する生徒は、自分から外国につながることを切り出すほうがよい。そうでないと、言葉が不十分であることで面接官の印象を悪くしたり、入試で不利になってはいけない。こうした事情からJSL生徒用の「面接想定問答プリント」資料6を用意した。JSL生徒は、例えば「あなたはなぜこの高校に入りたいですか」と質問されれば答えられても、「本校の志望理由を述べなさい」と質問されると、質問の意味がわからなくなってしまう。このシートのポイントは、高校の先生が質問するとき発する言葉も想定して学ぶことである。

この回答を考え作文する作業は各自で行い、自分の回答がしっかり書きあがるまで推敲を重ねた。この時も、早くしっかり書けた生徒が遅れている生徒の手伝いに入って書き方のアドバイスをした。それによって、他の人がど

---

<sup>15</sup> 他に、在籍のフィリピン生徒対象に、選択授業に「日本語」を設定し、数学入試問題の計算問題だけをできるようにするクラスも作った。



んなことを書いているのかを知ることできるし、受験高校が異なれば面接の答えが同じであってもいい。ある程度彼ら全体に共通する回答の部分はみんな意見を出し合って考えた。互いの面接回答を読ませ合って「他の人のいいと思う答えはもらいなさい」と勧めた。

「中学校生活で印象に残ったことは」という質問に、「修学旅行でクラスのみんなと一緒に風呂に入ったことです。とても恥ずかしかったけれど、クラスの人が近くなった気がしました」とか、「将来の夢は？」に対して「僕は日本に来て日本のラーメンを食べました。あれは中国にはないです。とてもおいしかったから、高校を出たらラーメン屋さんで修行して、将来はふるさとに日本のラーメンを紹介したい」といった、彼ららしさのある回答がたくさん出てきた。

#### 4) 「自己PRカード」<sup>16</sup>

各自の受検校について「本校が期待する生徒の姿」という都の冊子に書かれた内容を踏まえてまとめる。まず自分のこれまでを振り返り、日本に来て自分は何を得たのか、どう変わったのかを考えた。また、出身国と日本の二つの言語と文化を知っていることや、異文化に飛び込んでたくさんつらい思いをしながら乗り越えてきた体験、そこから学びとった事柄などは、JSL生徒でなければ書けない「自己PR」である。そうした特性を生かした内容をみんなで作った。ここでも、各自の体験を出し合う中で、「私もそうだった」と気付いた内容は、それぞれの自己PRカードにもらって書いた。

「面接想定問答プリント」や「自己PRカード」を書くことは最も実践的な日本語の学習である。進路の時間や宿題で回答を作り、ある程度まとまったら先生に見せてチェックを受けるという作業を繰り返した。まず、内容に何を書いたらいいか、これを考えることに時間がかかり、次にそれをどう日本語で表現するか、ここでも直しがかなり入る。参加生徒数が多いために、毎回の授業で書き上げたところまでをコピーして、次週までに筆者が添削を

---

<sup>16</sup> 都立高校の出願時に提出するA4・1枚の紙。志望理由と入学後にしたいこと、中学校生活で自分が得たこと、この2項目についてまとめる。面接の資料とし、合否線上のときはこの内容を参考にするとのこと。

して返すという作業を繰り返したが、とても十分とは言えない。その分自分で考え、友達と相談する比重が高まった。実際の記載例を資料7に示す。

## 5.) 面接練習

「面接想定問答プリント」が書きあがった生徒から面接練習を行った。他の生徒が「面接想定問答プリント」を作成している同じ教室で行った。

まず作法について。ドアのノックやお辞儀のしかた・座り方など、在籍学級でも練習することだが、日本のマナーをあまり知らない生徒たちの指導は、在籍学級の比ではない。細かい作法にこだわりたくはないが、彼らが面接で不利になってはいけない。女子でも大股開きで座る生徒やお辞儀が変な生徒など、高校側の印象が悪くならないよう、直せるところは注意していった。そうした「日本式作法」の指導に反発があるかと思ったが、やりかたの一つ一つをとっても気にした。例えば、お辞儀はドアを開けて部屋に入る前か後か、立つ位置は椅子の左か右かなど。日本人は踏みはずしてはいけない作法とどうでもいい作法の区別がわかるが、彼らはその判断ができないために、不安だったのだろう。

次に、日本人生徒と異なる困難は、面接官の質問の意味がわからない場合があることである。その場合にどう対処するか。「質問の日本語の意味がわかりませんでした。もう一度言ってください」と自分から申し出ることも練習項目の一つである。また、話したいことはあっても、日本語の表現方法がわからない場合にどうするか。こういう場面に遭遇するような質問を出し、「答えにつまる場面の練習」も行った。本番に慣れるためにも、みんなのしている前で練習し、ほかの人の答え方を見て学ぶことを繰り返した。見ている側の生徒には、よくできたところや、こうしたらもっと良くなるという点を指摘してもらうことにした。

みんなの前で面接の練習をするのは恥ずかしいだろう。だが彼らは「本番に慣れるには、できるだけ緊張する経験をたくさんした方がいい」とはつきり言い、最後の12月はできるだけ早く教室に来て、授業が始まる前に自分の面接練習を1回でも多くやってもらおうと、先を争っていた。

「人のふり見て我がふり直せ」の通り、この面接練習は、自分がやる時も

ほかの人を見る時も、本当に真剣であった。こちらが注意しなくても、作法や話し方や、質問の聞き直し方など、「それじゃだめだよ、いい、やって見せるからね」とほかの生徒がどんどんお手本を示してくれた。面接練習の順番を待ちきれない生徒たちは、教室の別の隅で生徒同士で面接練習をやり始めた。筆者が高校の先生の面接官役をやる様子を毎回見ていたので、その真似も非常にうまくなった。生徒役、先生役を交代しながら、繰り返し練習していた。

その結果、面接内容はほとんどの生徒が非常に高いレベルまで到達した。中途半端な練習しかしていない日本人生徒よりはるかにうまくなった。「暗記しろ」とは一度も言わなかったが、準備した答えはみな暗記していた。ちょっと質問の仕方をひねっても、わからなければ聞き直し、見事に自分の考えを最後まで述べるようになった。そして最後に質問者が「自己 PR をしてください」「最後に言い足りなかったことがあったらどうぞ」といった場面で、彼らはしっかりと訴えた。日本に来て時間が短いこと、今の段階では日本語の勉強が大変で、十分に自分の実力を発揮できていないこと、でも高校の3年間では努力を重ねて本来の実力を発揮できる所までがんばるので、合格させてほしい、と。練習の場面ではあっても、生徒たちが心から訴える姿は心を打つものであった。面接練習は今までも毎年やってきたことであるが、生徒を個別に支援するやり方では到達できなかったレベルまで引き上げることができた。

## 2-2-6. 受験の諸注意

12月の最終段階で行うことは、再び情報提供を行うことで、内容は受験にともなう諸手続きの説明である。願書の書き方・受検料の払込方法・出願の手続き・受験当日の動き・入学手続きなどである。これらは3学期に各在籍校で、受験生全員を体育館などに集めて「前日指導」として行う内容である。

例えば、受検料は事前に金融機関で振り込み、領収書を受検票の裏に張り付けて出願するといった手続きは、ほとんどの日本人生徒は、もし説明がわかかっていなくても、親がやってくれるが、JSL 生徒の場合、自分でやらなければならない。受検票の書き方も、書くことを指示する用語、たとえば「現

住所（出願時の住所）「出願区分」というのはどういう意味か、この段階までに学んだ日本語では対処できない用語が多い。さらに、出願の日はいったん中学校に登校してから高校に行き、手続きが終わったら中学校に戻るが、入試の日には直接高校に行き、終了後も学校には戻らない、などの細かい注意が、在籍校の説明だけでは十分に伝わらない危険性がある。そして最後には、合格発表に名前があっても入学料を払いこまなければ、入学手続きをしたことにはならないということをしっかり伝えなければならない。過去に、合格発表を見て喜んだだけで、あとは何もせずあやうく入学取り消しになる生徒がいたのである。

12月の最後に冬休みの学習方法について確認して、JSL進路学習は終了した。3学期は個別に日本語学級に連絡して授業時間の予約を取り、支援を行う形態にした。受験の寸前まで、面接練習・わからない問題の解き方・作文練習などで、週に1～2回通級を続けた。一方、3学期はまったく連絡がなく、通級しない生徒もいた。支援が不要ならそれでかまわないだろう。ただ、自分で連絡しないと支援は受けられない。このシステムがわかっていない恐れがある場合は、在籍学級の担任からの要望で、3学期も固定した授業時間に通級を続けた生徒もいる。

### 3. 受験状況と結果

平成22年度の受検状況について述べる。日本語学級で受検支援に関わった生徒17名のうち、高校以外の機関と私立高校に単願推薦で早々に合格を決めた生徒が合わせて3名おり、彼らを除いた14名が都立高校の受検に臨んだ。私立高校を受検したのは、単願推薦2名、併願優遇1名の計3名のみである。13名は都立高校のみを受検した。

最初の都立高校推薦入試・在京外国人入試・海外帰国生徒入試<sup>17</sup>・中国引揚生徒入試の受検は8名で、合格を決めた生徒は5名であった。このうち1名は調査書の成績上ではとても推薦入試で合格できるレベルではなかったが、

---

<sup>17</sup> 日本国籍で「帰国」3年未満で保護者と同時入国の生徒がこの入試を受検できた。

面接で自分の状況を非常に熱心に訴えたと言っていた。面接練習を重ねた結果が合格につながったのかもしれない。3名が不合格になったが、推薦入試での不合格は折り込み済みである<sup>18</sup>。推薦入試の不合格で次の一次入試にダメージを受けたら嫌だと考えて、最初から推薦入試の受検を放棄した生徒もいた。

次の一次入試に臨んだのは9名である。現在の制度になってから最も競争率の高い入試になった。不況の影響であろう。従来、やや合格が厳しい学校であっても「最下位でいいから合格しなさい。卒業までに上位グループに入ることを目標にがんばりなさい」と言って、受検させてきた。それで何とか滑り込み合格できる場合が多かった。そもそも本来の実力で受験していない生徒たちである。高校で過ごす3~4年間の時間は、来日してから受検の日までの時間より長い。今後の高校での学習を通じて、今よりも日本語力も学習成績も大いに向上する可能性がある。しかし今回の応募倍率では、合格は厳しいと思われた。筆者は「落ちるかもしれないから、受検校を変えようか?」と投げかけたが、「どこでもいいってわけじゃない、やりたいことがあってこの高校を選んだのだから、他に変えることはできない」と生徒の方がきっぱり言った。

結果的に一次入試・分割前期試験<sup>19</sup>で、4名は合格したが、5名は不合格で、二次募集・分割後期試験に回った。次が全日制高校に入学できる最後のチャンスである。一次入試で非常に競争率が高くなったため、定員割れによる二次募集をする高校はほとんどなく、分割後期入試を行う高校の中から受検校を決めなければならなかった。このうち1名は分割前期入試で不合格だった同じ高校に分割後期入試で合格できたので幸いだった。だが2名は、次の受検校の選択肢には、今まで考えてきた高校はまったく入っていなかった。

---

<sup>18</sup> 東京都立高校の推薦入試は、中学校の調査書と面接・作文などで合否が決まり、学力検査はない。この入試は、高倍率なので、不合格は想定済み。その次に行われる一次入試(3か5教科の学力検査)の合否でほとんどの生徒が進学高校を決定する。

<sup>19</sup> 東京都立高校の入試では、一次募集で定員に満たなかった場合、二次募集が行われる。それとは別に、最初から入学定員を分割して2回入試を行う場合、分割前期入試・分割後期入試という。分割募集を行う高校は、合格得点の高い学校にはない。

不合格がわかった直後から、もう一度高校について調べ、「志望動機」をその学校に合わせて組み立て直した。1 学期からせっかく時間をかけて高校について調べてきたが、それを生かすことができない結果になってしまった。

残りの2名は、この厳しい入試状況であっても、受験校を考え直すことがどうしてもできなかつた。当初の受検希望校の範囲で二次試験の受検校を決めて受検した結果、二次試験でも不合格になってしまった。同じ高校であっても、全員が受検する分割前期入試における合格水準と、一次試験の不合格者ばかりが集中する分割後期入試における合格水準は実はまったく異なるのであるが、そのことについて本人と話をする機会がないままであった。家庭に電話がなく、両親の携帯電話だけが連絡ツールの場合、職場では電源を切っていることが多い。忙しい入試日程では、とうとう十分な情報提供を行うことができなかった。この2名は、最後に定時制高校の二次募集を受検して、1名は合格し定時制高校に進学を決めた。入学後の転学試験で全日制高校への転学を旨ざすと言っている。最後の1名は、定時制高校の二次募集でも不合格になり、母国への帰国の準備を始めた。その直後、東京都は定時制高校二次募集でも300名を超える不合格者を出した事態を重く見て、4月に入ってから急遽三次募集を行ったが、この情報が生徒に伝わっていたか、異動した筆者には不明である<sup>20</sup>。

例年になく長い入試であった。厳しい状況で、最後に合格からはじき出された生徒の中に多くのJSL生徒がいたのではないかと懸念される。

#### 4. 3年生の受験体験を聞く会

3月に日本語学級主催の「3年生の受験体験を聞く会」を行った。これは、JSL進路学習とは別に以前から日本語学級で行ってきた行事で、1・2年生の通級生徒と保護者のために、3年生が話をするものである。第一部は全体会で、代表的な進路を決めた生徒に体験を話してもらおう。今回は、在京外国人入試の合格生徒、英語特別推薦の合格生徒、私立単願受験の生徒、都立全日

---

<sup>20</sup> この生徒はフィリピンに帰国して大学を受験し、合格して進学したそうである。

制普通科5教科受験の生徒、理数系重視の高校を選んだ生徒に話をしてもらった。第二部は分科会で、卒業生の進路一覧を見て、1・2年生が興味をもった3年生のところへ行き、自由に話を聞く。以前は、ほぼ中国語とタガログ語の生徒だったので、母語別にグループを作って母語で先輩と話し合いをしていた。しかし今回は多言語化したため、少数言語の生徒のために通訳を頼み、その生徒のためには3年生にも、日本語で話をしてもらおうよう頼んだ。

この会は、都全域で行う進学ガイダンスとは違って、同じ日本語学級で学んできた顔見知りの先輩の受験体験を聞くということで、毎年次の3年生のために、非常に有益な学習の動機付けの機会になっている。

## 5. JSL 進路学習を省みて

### 5-1. この学習の成果と残された課題

成果の第一は、このJSL進路学習で、生徒が自分の進路を主体的に選択していく姿勢が大きく進展したことである。だが一方、親の姿勢を変えることはできなかった。最後の受験校決定の三者面談に立ち会ったのは在籍生徒だけであったが、そのときに「私は何もわからないから先生が決めて」「子どもが決めたならそれでいい」という従来通りの姿勢の親が多かった。今回は、ほとんど生徒が自分だけで進路を決めたことになる。次の課題は、どう親に情報を伝え、家族で話し合って進路決定ができるようになるかである。

第二に、JSL進路学習としての、日本語の側面での成果も大きかった。推薦、単願、願書、内申～その他多くの受験に関わる専門用語を生徒たちが日本語でどんどん使う姿を見たのは今回が初めてである。従来中国の生徒は、こうした漢字を中国語で読み、日本語の読み方はまったく定着しなかった。つまり在籍学級での情報提供を聞き取れないということである。フィリピンの生徒も、今回は漢字を見て意味がわかる、読み方もわかるということまでできた。

特に、「面接想定問答プリント」の回答と「自己PRカード」の記述の段階で、仲間と相談しながら各自に合った答えを用意し、それを日本語ができる生徒が手助けしながら作り上げていった過程での日本語の学びは大きかった

と感じる。まさにピア・ライティングによる学習であった。最後の日本語の直しは筆者が行ったが、そこに至るまでに内容豊かな答えを作り上げたのは、一人だけの力ではできなかったはずだ。それぞれの生徒がそれまでの数年間で身につけた日本語の表現を提供しあって、母語と行き来しつついちばん適切な表現を選んでいった。そして、最後は全部暗記して面接に対応できたのであるから、ここで学んだ日本語は「自分のための表現」として定着したことであろう。

しかし、高校受験案内の本や高校のHPの情報を自力で読み取る力がついたかという点、中国人生徒はできるようになったが、フィリピン人生徒で自力でできたのは、10人中3人だけであった。うち2人は小学校で来日した生徒、残りの1人は中1の秋に来日した生徒である。他の7人は漢字力が不足で読み取れず、2人に読んで訳してもらっていた<sup>21</sup>。漢字力のある2人はあらゆる場面でフィリピン人グループのリーダー役となっていたので、この2人を頼りにしながら他の7人も真剣に進路を考えていたとは思いますが、情報を自分の力で読みとることができないということは、取り組みの主体性を大きく左右する。きちんと内容を理解していないまま、何となく高校を見学していた可能性もある。漢字力の低い7人は、「自己PRカード」は高校に提出するものなので、最後にできるだけ漢字に直したが、「面接想定問答プリント」は自分用なので、自分で読めなかったら元も子もないと、ほとんどひらがなで書いた。

結局、漢字力の不足は進路のみならず、すべての学習のネックになっていた。日本語学習期間が3年未満で非漢字圏の生徒が日本人同様に読み書きの力をつけるのは並みの力の生徒には無理で、教科学習と進路のすべてに高い壁になっている。日本語学習の最初からどうやって漢字学習に取り組むか、問題はここに立ち帰ることになる。しかし、これほどの高いハードルを非漢字圏のJSL生徒に課すより、日本社会の側が、漢字が読めなくても学習ができて、進学の可能性を開く方策を考える時期に来ているのではないだろうか。

---

<sup>21</sup> もう一人は授業の後半になって加わった小学校時に来日した男子生徒で、フィリピン人女子生徒同士の助け合いにはあまり加わっていない。



第三の課題は志望校の決定である。平成22年度の都立高校入試が、この制度制定以来最高の競争倍率となった結果、自分でしっかり選んだ志望校に合格できない生徒が3名も出て、筆者は生徒に対して非常に申し訳ない気持ちである。以前のように、受験の自覚が足りない生徒なら、「〇〇高校を受検しなさい」と言えばその通りに受験し、安全な高校を指定すればすんなり合格でき、自分の意志で選んだという自覚もないために、期待通りであったかどうかさえ考えないですむ。しかし、今回は自分でしっかり考えたからこそ安易に受検校は変更できなかったのであり、結果として不合格になってしまった。この辺の判断は非常に難しいと感じる。

だが、今回の生徒たちは、高校に進学する意味、高校生活の目標についてもじっくりと自分と向き合って考え、苦しくても受験勉強に取り組み、仲間とともに重要な選択をしていった。それはそれぞれの成長に大きな意味をもったのではないかと考える。志望通りの高校に進学できたかどうかを超えて、高校生活に前向きに取り組み、ほとんどの生徒が卒業までこぎつけるのではないかと期待している。

そして第四に、授業を計画した段階の筆者の予想を遥かに超えた成果は、彼らの仲間の力の大きさである。生徒たちは、来日の時期や日本語レベルが異なり、通級の曜日や時間が違うと、同国人でも出会う機会がない。授業開始の段階で彼らがどの程度の知り合いだったのかよくわからないが、この授業で全員が集まるまで、互いに顔見知りでない生徒も多かったはずである。それがすぐに同国人同士でつながった。全員が仲良しになったとは言わない。だが、誰かが誰かに関わり、助け、励ます姿がいつもあり、孤立する生徒はいなかった。特にたった一人の韓国人生徒が心配だったが、もともとしっかりした能力の高い生徒で、その生徒が周囲の生徒を助けることも多く、いい関係ができていた。

生徒の数が多く、教員の支援は従来の進路の時間よりずっと薄くなっていった。だが、仲間同士の支援はそれを補ったのではなく、教員ではできない別の力を持っていたと感じる。ともに行動し、精神的に支え、励ます、それが「～しあう」形を作れるのは仲間であり、教員ではない。たぶん、生徒たちの授業参加の動機も半分は、「仲間で集まること」にあったのではない

か。特に、遅刻してきてみんなをちやかして、自分の作業はほとんど進まないのに、ワイワイと仲間と一緒に下校していく一部の男子はその傾向が強かったと感じる。

これだけの仲間の力の中にも、結局自分の進路を決められなかった生徒もいる。進路学習の時間にはいて、作業もみんなに助けられてやってはいた。しかし、卒業後どうするのかという問いに、最後まで「知らない」(＝わからない)と言いつづけた。フィリピンに帰ると言ったり、日本にいると言ったり、高校に行くと言ったり行かないと言ったり。フィリピンの他の生徒たちも、「何考えているのか、私たちには自分の気持ちを話さないからわからない」と言っていた。面接練習もニヤニヤするだけで答えない。この様子を見て、学力的にはいちばん苦しい生徒でさえ「ちゃんと話せよ、試験だよ」と彼女に忠告していた。結局ぎりぎりになって、「みんなと同じ高校を受検する」と言ってお願したが、合格はできなかった。日本語学習そのものが最初から意欲がなく、学習制限期間満了で打ち切りになっていて、面接に対応できる日本語力がついていなかった。結局、進路学習は来日以降のすべての生活や学習の集大成であり、この時間だけで問題を解決することはできない。仲間の力も万能ではない。

そして、第五に進路指導と日本語学級の関係である。今回は緩やかに担任と連携できたと感じる。学級担任には、毎回の授業報告をFAXで伝えた。どの程度読んでくれていたかは定かではない。各在籍校の進路希望調査の提出期限や三者面談の日程も、8校もあって筆者はつかみきれなかった。だから、「JSL 進路学習で自分がやったとおりに書いて提出しなさい」と言っただけだったが、その志望校について担任から特に申し入れはなかった。担任と生徒の考えが噛み合わないことはあった。その場合は、生徒が志望校を考える際の後方支援に徹して、担任に対して意見をはさむことはしなかった。

だが、改めてもう一つ日本語学級の独自の役割に気付いた。学級担任は、3年でJSL生徒を持つという経験があまりない。JSL生徒の入試に関しては、日本語学級のほうが遥かに情報も経験ももっている。在京外国人入試、海外帰国生徒入試、中国引揚生徒入試、英語特別推薦、私立高校の外国人入試・外国人生徒枠、帰国子女入試に外国人を含める高校とそうでない高校、定時

制高校の中で JSL 生徒を前向きに受け止めてくれる高校がどこかなどについて、学級担任はほとんど情報をもっていない。さらに、入試関係書類における外国籍生徒の名前の扱い方、ルビ振り特別申請の手続きなども、普通は手続きに気付かない。日本語学級はこうした意味で、JSL 生徒の進路指導をする担任を後方支援することも役割ではないだろうか。今回は「そんな制度があるなんて、日本語学級から言ってもらわなければ気付かなかった」という担任から感謝の言葉が多かった。

本来こうした説明は都教委の業務である。都は中国引揚入試説明会さえ受検者の減少でとりやめた。分厚い「入試要綱」にすべて書いてあるとはいえ、必要な情報を採し出せない。まず都教委が、学級に JSL 生徒がいる担任向けの入試説明会を開くべきである。

ただし、都教委が説明会を行っても、とても一度に理解できないほどの面倒で不合理な「受検資格認定要件」がある。それは、役所が想定する「帰国生徒」・「外国人」・「中国引揚生徒」の定義が、現実の JSL 生徒の実態と合わないためである。そのために、生徒がどの受検の資格を持つか、細かく事情を聞かなくてはならない。こんなに面倒では、日本語学級が設置された地域の JSL 生徒以外は必要な対応を受けられない。都教委は、すぐに JSL 生徒の実態を調査し、彼らの高校進学の道を開くために、実態に合う特別入試制度を早急に実施すべき時期に来ている。

## 5-2. JSL 進路学習を実施する上のポイント

この JSL 進路学習は、従来の個別支援の段階からは大きな飛躍を遂げたと感じる。単発の一地域の実践にとどめないために、活動を行う上でのポイントをまとめておきたい。

第一に、JSL 生徒を個別に支援するのではなく、できるだけ同一地域内の生徒たちを集め、進学をめざす仲間として育てて、彼らが相互に支援できる力を育てることである。

第二に、支援者側が彼らのやるべきことを肩代わりするのではなく、彼らが自分の力で必要な情報を得て、必要な動きができるようになるための支援をすることである。

第三に、JSL カリキュラムの考えにのっとり、日本語のレベルは可能な限り下げ、しかし必要な情報の質は落とさないこと。そのために進路資料はライト版（読解教材）を用意する。活動は可能な限り日本語で行うが、無理な部分は母語を使って（二言語力の高い生徒の力を借りて）、必要不可欠な情報は確実に理解させる。

第四に、進路決定の最終責任は在籍学級の担任にあり、担任の進路指導が理解できるような先行学習を行う。必要に応じ学級担任と連携する。

これが今回の実践の要であった。あとはそれぞれの地域の実情に合わせて自由にアレンジしていただければよいと思う。

高校進学システムは各自治体で異なるため、情報は単純には共有できないが、JSL 生徒の人生がかかる重要な支援である。全国で進路支援に取り組む方たちと、情報交換を積極的に進めて、よりよい支援を追求していきたいと願っている。

## 参考文献

- 山崎香織 2005 「新来外国人生徒と進路指導—「加熱」と「冷却」の機能に注目して」 『異文化間教育』 21 号
- 佐藤 学 2006 『学校の挑戦 学びの共同体を創る』 小学館

## 資料 1

## H21 進路学習年間計画

回	月	日	内容	宿題
1	4	17	進路希望調査、今年1年の流れ、推薦入試、アルバイトと正社員	進路希望調査
2		24	説明会情報、受験勉強とは何か、その仕方、奨学金	勉強計画と記録
3	5	1	私の10・40年後、学歴と職業、計画表途中経過と悩み、性格・適性テスト、都立高校の種類	私の10、40年後、成績・得点記入、適性テスト
4		8	都立入試の基本情報、都立総合得点の出し方、内申の出し方、偏差値、実力テスト	総合得点を出す
5		15	受験案内の本の見方	
6		22	進路説明会の資料の読み取り	
7	6	5	期末の勉強	
8		12	期末の勉強	
9		19	期末の勉強、夏休みに見学する高校を決める	
10		26	高校見学情報収集 三者面談について	
11	7	3	高校見学情報収集	
12		10	1学期の反省、夏休みの勉強計画、高校見学情報収集	高校見学のまとめ
13	8	28	夏休みの高校見学の結果まとめ 入試予測得点の修正	
14	9	11	2学期の学習計画、説明会参加計画＋見学報告	
15		18	説明会参加計画＋見学報告 受検計画作成	
16		25	説明会参加計画＋受検計画作成	
17	10	2	説明会参加計画＋受検計画作成	
18		9	受検計画作成＋説明会参加計画＋名前確認	受検計画
19		16	受検計画作成＋説明会参加計画＋名前確認＋面接想定シート	受検計画
20		23	名前確認＋面接想定シート＋本校の期待する生徒の姿＋自己PRカード	面接想定シート
21	11	6	名前確認＋面接想定シート＋本校の期待する生徒の姿＋自己PRカード	面接想定シート
22		13	見学報告＋面接想定シート	面接想定シート
23		20	見学報告＋面接想定シート	面接想定シート
24		27	見学報告＋面接想定シートしあげ＋面接練習＋自己PRカード	自己PRカード
25	12	4	面接練習＋自己PRカード	自己PRカード
26		11	手順(出願・受検・手続き)、銀行振り込み、ルビ措置、受験校決定	自己PRカード
27		18	願書の書き方、3学期の進路学習(個人相談・予約制)、冬休みの勉強法、名前表記、ルビ申請の確認	自己PRカード

## 資料 2

日本語進路学習タスクシート (1) 3年 組 名前

### 10年後の自分の姿( 歳)

1. あなたはどこの国のどんな地域に住んでいますか。
  2. あなたはだれといっしょに生活していますか。
  3. あなたはどんな仕事をしていますか。
  4. あなたはなぜその仕事をしていますか。
  5. あなたはどこで働いていますか。
  6. あなたは何時から何時まで働いていますか。
  7. あなたはどのくらい収入がありますか。
  8. あなたの仕事は疲れますか。
  9. あなたの楽しみはなんですか。
  10. あなたにとってつらいことはなんですか。
- .....

### 40年後の自分の姿( 歳)

12. あなたはどこの国のどんな地域に住んでいますか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜですか。
13. あなたはだれといっしょに生活していますか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜですか。
14. あなたはどんな仕事をしていますか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜですか。
15. あなたはどこで働いていますか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜですか。
16. あなたは何時から何時まで働いていますか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜですか。
17. あなたはどのくらい収入がありますか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜですか。
18. 仕事は疲れますか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜ

ですか。

19.楽しみはなんですか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜですか。

20.つらいことはなんですか。10年後と変わりましたか、変わりませんか。それはなぜですか。

21.あなたは自分の人生に満足していますか、していませんか。それはなぜですか。

.....

### 私の進路希望

( 月 日記入) 組 \_\_\_\_\_

1. 卒業後の進路=自分はどれにするか、第一希望は1, 第二希望は2を記入

- ( ) ①就職
- ( ) ②高等職業技術専門学校
- ( ) ③専修学校
- ( ) ④就職+定時制、通信制
- ( ) ⑤専門学科の高校、高等専門学校
- ( ) ⑥全日制高校 (普通科、総合科、コース制)

2. たくさん高校がある。どうやって選ぶか？

(最終的には5校くらい受験できる。決まらない人は10校くらい受験する)

- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_

3. 成績の現実を知る

- 1学期の通知票を見て、3科、5科、9科合計を出す。  
→内申計算  
内申ってなに？
- 実力テストの標準点=偏差値を見る  
偏差値ってなに？

資料3

**私の受検計画** ( ) 中学校 名前 ( ) 担任 ( ) 先生

**【1】いちばん新しいデータ ( 月 日)**

素内申	換算内申 (5科受験) 1 : 1.3	換算内申 (3科受験) 1 : 1.2	標準点 3科	標準点 5科	予想得点 (5科) 7 : 3

予想得点 (5科) 6 : 4	予想得点 (5科) 5 : 5	予想得点 (3科) 7 : 3	予想得点 (3科) 6 : 4	予想得点 (3科) 5 : 5	予想 得点

**【2】受検計画**

レベル (上/同/下)	希望 順	高 校 名	最 寄 り 駅	標 準 点	予 想 合 計	受 験 教 科 数	点 数 : 内 申	其 他 (得 点 比 重)	説 明 会 ・ 学 校 公 開
				∪	∪		:		
				∪	∪		:		
				∪	∪		:		
				∪	∪		:		
				∪	∪		:		
				∪	∪		:		



資料 4

高校訪問のまとめ

3年 組 名前 ( )

	よかったところ、印象に残ったところ、 いやだなと思ったところ
高校名	
見学した日	
自宅からの経路	
通学時間	
自分にとっての合格可能性	
学校の周りのようす (地域、環境)	
校舎・設備	
授業カリキュラム、時間割	
年間行事	
生徒の様子	
先生の感じ	
その他 (部活、食堂、売店、外国人生徒など)	
どのぐらい行きたい気持ち？ (○をつける)	全然行く気なし/ 他が落ちたら行ってもいい けっこう行きたい/すごく行きたい

3年 組 \_\_\_\_\_ 名前 \_\_\_\_\_

## 【1】1学期の学習の反省

1. 宿題、小テスト、提出物は、全部ちゃんとやったか  
(やった だいたい あまりやってない ぜんぜんやってない)
2. 定期テスト前には計画を立てて、しっかり勉強できたか  
(やった だいたい あまりやってない ぜんぜんやってない)
3. 中間・期末テストのまちがえたところを、全部やりなおしたか、今はわかるか  
(やった だいたい あまりやってない ぜんぜんやってない)
4. 2年の時より、勉強時間を1日1時間長くして、宿題のほかに受験勉強をやったか  
(やった だいたい あまりやってない ぜんぜんやってない)

2年のときと同じ生活の人 → 今日から生活を変えてください

## 【2】夏休みの勉強 = 今年は夏「休み」ではない

夏休みにしっかり勉強するか、遊んでしまっちゃんと勉強しないか、で進路は分かれる

## 【3】宿題 全部、必ず、やる = 2学期の成績の一部です

- 1) 宿題一覧表を見て、いつどれをやるか計画を立てる
  - ・時間がかかるものは何? ( )
  - ・外に出かけてやるものは何? ( )
  - ・他の人の協力が必要なものは何? ( )
  - ・何をやるか考えなければならないものは何? ( )  
読書感想文、税の作文、自由研究など
  - ・ドリル系は何? ( )
  - 全部で何ページあるか? ( )
- 1日何ページやるか決めて、カレンダーに割りふって、毎日やる
- 2) 夏休みの計画表に、いつ何をやるか、わりふる

#### 【4】受験勉強

##### 1) 夏休みは何を勉強するか

- ・不得意なところ、わからないところ、勉強していないところをやる  
私がやること ( )

##### 2) どうやって勉強内容を決めるか

- ・都立高校入試の過去問題集を買って、まず英語と数学を全部やる。

→全然できない単元があったら：教科書を見る、3年間の総復習の本を見る、問題集をやる

##### 3) 覚えるものをやる

- ・漢字、英単語は勉強する本を決める。
- ・毎日時間と分量を決めてやる

##### 4) 英語と数学がだいたいできる人

- ・入試問題の理科・社会をやってみる

→全然できない単元はあるか？

→1・2年の理科・社会でやっていないところを勉強する

→教科書を読む、3年間の総復習をやる、問題集

##### 5) 勉強計画を立てる

- ・規則正しい生活：朝は早く起きる、食事の時間を決める
- ・勉強は、学校と同じ生活をする。50分やって、10分休み時間、1日6時間  
それでできない人は30分勉強したら、休み時間にする
- ・教科をかえて勉強する。(あきないように)
- ・がまんしすぎない：見たいテレビは見る、やりたいことの時間を作る、いやになったら  
どうするか(気分転換)、を考える
- ・日曜は勉強の計画を入れない → 予定どおりに終わらなかったところをやる
- ・はじめだけががんばって、計画の通りにできなくて、やめてしまうのがいちばん悪い。  
できなかつたら、計画をゆるくして、くじけないで、止まらないで勉強を続ける。
- ・私の基本的な生活  
起きる時刻 ( ) 寝る時刻 ( )
- ・私の勉強のしかた(うまくできる方法)

( )

資料6

面接想定問答プリント (20 )年 3年 名前( )

No.	質問	意味	答え	清書
1	本校の志望理由を述べてください。	どうしてこの学校に入りたいですか。		
2	本校をどうして知りましたか。	なぜこの学校を知っていますか。		
3	本校までの通学経路と通学時間を説明してください。	学校までどうやって来ましたか。		
4	本校を何回訪問しましたか。それは何の機会でしたか。	何回この学校に来ましたか。それは、高校で何をやっている日でしたか。		
5	本校の高校生活に望んでいることは何ですか。	この高校で何をしたいですか。		
6	本校でやりたい部活がありますか。			
7	将来の希望を述べてください。	将来、何をしたいですか。		
8	趣味や特技を教えてください。	何をするのが好きですか。特別にできることがありますか。		
9	長所と短所を述べてください。	あなたのいいところは何ですか。わるいところは何ですか。		
10	あなたの得意教科と不得意教科、その理由を述べてください。	どの教科が好きですか。どの教科がきらいですか。それはなぜですか。		
11	あなたの出身中学の校長先生と担任の先生を紹介してください。	あなたの中学校の校長先生はだれですか。どんな人ですか。クラスの先生はだれですか。どんな人ですか。		
12	出身中学校の特色は何でしたか。	あなたの中学校はどんなところがいいですか。ほかの学校とちがうところがありますか。		

→面接想定問答プリント ある生徒の実際の記入例

No.	答え	清書
1	勉強がしっかりわかるように、 教科をいっしょうけんめいや りたいです。	ぼくは2001年12月に日本に来ました。中国で小学校6年 生でした。でもすぐ日本の学校に入りませんでした。 2007年10月に中学校1年生に入りました。勉強がわから ないところがあります。だから
2	(非公開)	
3	〇〇〇 ↓バス □□□	
4	説明会に1回来ました。	
5	学校で友達をつくりたいです。小学校6 年生の勉強からやりたいです。	中学校では日本語がわからないから、勉強でき ませんでした。
6	バスケットボールをやりたいです。はじ めてですが、がんばります。	
7	将来は中国で日本 のラーメンの店をつ くりたいです。	日本の人はラーメンは中国料理だとおもっています。でもあれは中 国にないです。ぼくは日本ではじめてラーメンを食べました。おい しかったです。中国の人に日本のラーメンをおしえたいです。
8	ぼくは時間があるとき中国の小説を読みます。ぼくは本が 好きです。	
9	長所はぼくはとしうえの人を尊敬しています。短所はむず かしい問題があるとすぐあきらめてしまいます。	
10	好きな教科は社会の歴史です。私 は、授業のとき、漢字がわかるので、 大部分理解できます。	不得意な教科は英語です。ぼくが日本の中学校 に入ったとき、もう英語の勉強が進んでいました。
11	〇〇校長はいつもみんなに笑顔でした。担任は〇〇先生です。 ぼくは日本語がまだできないから、学校の中の問題は全部先生が てつだってくれました。ほんとうにしんせつなせんせいです。	
12	中学校のみんなはあいさつを大切にします。先生と生徒があいさ つを交わす。	

## 面接想定問答プリント

No.	質問	意味	答え	清書
13	中学校時代の思い出や一番印象に残っていることを話してください。	中学校の生活でいちばん忘れないことは何ですか。		
14	中学校時代にどんな部活に参加していましたか。一番の思い出は何ですか。	部活は何でしたか。いちばん心にあることは何ですか。		
15	3年生の学級はどんなクラスでしたか。			
16	中学校生活であなたが努力したこと、努力が足りなかったと思っているのはどんなことですか。	中学校で何をがんばりましたか、がんばらなかったことは何ですか。		
17	中学校時代に、学校の中の役割や、またボランティアなど社会的な活動をしましたか。	学校でどんな仕事をしましたか。ボランティアをしたことがありますか。		
18	尊敬する人について話してください。	えらい、すごい、あの人のようになりたいと思っている人はだれですか。		
19	最近読んだ本の著者名と作品名と感想を述べてください。	最近どんな本を読みましたか。書いた人は誰ですか。どうでしたか、話してください。		
20	最近のニュースで一番印象に残っているのはどんなことですか。	今ニュースを見ていますか。どんなニュースがありましたか。話してください。どう思いましたか。		
21	あなたのご両親があなたによく言うことは何ですか。	お父さん、お母さんがいつも言うことは何ですか。		
22	休日はどうのように過ごしていますか。	休みの日何をしていますか。		
23	日本に来たのはいつですか。どこでどのくらい日本語を勉強しましたか。			
24	日本語のどこが難しいですか。			
25	今、教室で先生の授業はどのくらいわかりますか。どんなところに困っていますか。			

→面接想定問答プリント ある生徒の実際の記入例

No.	答え	清書
13	運動会です。2年生と三年生、どちらも障害物走にでました。一位になりたいから、がんばりました。でも2かいともけがしました。	
14	ぼくの部活は卓球部です。いちばん心にあることは卓球部のみんなが団結をしていることです。ぼくは二年生のとき、三年生の先輩はときどきぼくを助けてくれました。	
15	三年生のみんなはいっしょうけんめい勉強しています。まじめなクラスです。	
16	静かに授業をうけました。授業の時もあそんでなかった。がんばらなかつたことは勉強がわからないので、学校がつまらなくて、たくさんやすみました。	勉強がわかったら、休まないで、毎日きます。
17		
18	日本語学級の小川先生です。先生はせいとみんなのことをいっしょうけんめい考えます。いい先生です。	
19	中国のカンフー小説を読みました。ユーモアがあつて、おもしろかったです。	
20	今年から新型インフルエンザが流行したことです。	
21	いっしょうけんめいに勉強しなさい。	
22	休みの日は料理をつくることを勉強していました。	
23	2006年12月ごろ日本に来ました。2007年10月に中学校に入りました。中学校日本語学級で日本語を勉強しました。	1年間親戚訪問で日本へ来ました。中国へかえるつもりでした。だから日本の学校に入りませんでした。でも中国にかえるのをやめたので中学校へ行きました。
24	日本語の文法が難しいです。	
25	1年生の時の勉強は大部分中国でやりましたから、理解できました。でも2年と三年の勉強は日本語も内容もわかりませんでした。	

## 面接想定問答プリント

No.	質問	意味	答え	清書
26	中学校のとき、授業がわからないときはどうしましたか。			
27	あなたの国と日本を比べて気づいたことを話してください。			
28	自分のPRをしてください。	自分からもっと話したいことがあったら話してください。		

.....

### 資料7：自己PRカード ★生徒の実際の記入例

1. 入学を希望する理由 (この学校に入学したい理由と入学してから自分が取り組みたいと思うことなどについて記入しましょう。)
2. 中学校生活の中で得たこと (中学校生活の中で自分が特に伝えたいことを学校内外で体験したことから選び、そこから自分が得たことについて具体的に記入しましょう。)

生徒 A	<p>1. 貴校は人権を重視している学校ですから、ぜひ入学したいと思っています。なぜかという社会には弱い立場の人がいます。私は中学校1年の4月に日本の学校に入りました。自分が「外国人」の立場になってみて弱い立場の人の気持ちがわかるようになったからです。これは中国にいたら気付かなかったことです。</p> <p>将来は大学に進学して、国際警察に関係する仕事をしたいと思います。貴校では朝鮮語と合気道が学べるので、夢に向かってがんばりたいです。</p>
生徒 A	<p>2. 中国の詩人李白の「静夜思」は日本と中国で少し違ってしています。このことに中国から来た先輩が気付きました。そこで私は先輩たちと一緒にこの違いについて調べました。パソコンで調べたり中国の大学の先生に手紙を出したりしました。その結果、李白の原作は日本版で現在の中国の詩は清代に改作されたことがわかりました。この活動で、一人ひとりの役割をしっかりとやりました。一人ができることは小さいけれど、みんなが力を合わせるとできないことはないということがわかりました。</p> <p>この作品は●●区の「思いっきり表現してみようコンクール」で賞をとりました。新聞にも出て、中国でも紹介されました。</p>



→面接想定問答ポイント ある生徒の実際の記入例

No.	答え	清書
26	わからないところをメモをして、それからもう一度国語の先生におしえてもらいました。	
27	中国にいた時、一番の思い出はにぎやかで人々が大声ではなしをしました。日本に来た時、一番の思い出はまちがきれい日本人はマナーがいいとおもいました。	
28		

項目 29 として、自分で以下の質問を想定

**中学校でなぜ欠席がおおかったですか？**

→答え：日本語がわからないので、授業のときはつらかった。友達もできてないから、学校に行くのは嫌になりました。でもこれからは、私は一層の努力をします。

.....

生徒 B	2. 中学校 1 年生の時は、日本語がわからなくて、楽しいことがなかったです。2 年生の時林間学校に行きました。3 人一組になりました。3 人で一緒に風呂に入りました。初めてだから、はずかしかったです。2 人とたくさん話ができました。これも初めてでした。友情がうれしかったです。ぼくは中国にいた時、友達がたくさんいました。だから友達がいるのが当然でした。日本に来て、友達がいなくて、本当に寂しかったです。だからこの時、友達が重要だとよくわかりました。
生徒 C	2. 2 年生のとき職場体験で保育園に行きました。知らない子供のお世話をしましたが、みんなの笑顔がまぶしかったです。最後の日におなかがいなくて先に帰りました。また保育園に行きました。一人の女の子が私に手紙をくれました。その手紙をすぐに読みました。読み終わったら封筒の中に折り紙で作った犬が入っていました。とてもうれしかったです。私はいいお姉さんになれたと思いました。
生徒 D	2. 私は 2007 年 5 月のフィリピンから来て、●●中学校に入りました。日本語学級で日本語の勉強をしました。最初はむずかしかったですが、がんばりました。 私が●●中学校に来たとき、ちょうど運動会の練習をしていました。1 年生のプログラムにソーラン節がありました。私は初め踊りが全然分かりませんでしたが、クラスメートがいていねいに教えてくれました。言葉が通じなくてもやさしい友だちの気持ちわかってうれしかったです。言葉が通じなくて、もうだめかなと思ったとき、クラスメートのやさしい言葉が私の力になって日本でやっていける自信ができました。次に新しくフィリピンの生徒がきたとき、その人を助けて、役にたつことができました。

生徒 E	<p>1. ぼくは中国にいた時成績はよかったです。日本に来てまだ2年です。日本語が難しいので本当の力を出すことができていません。僕は大学進学を目指しています。貴校は1クラス的人数が他校より少なく、1年の国語、数学、英語は少人数で勉強できるので力を伸ばすことができると思います。</p> <p>僕はバスケットボールが好きで、中国で三年間やってきました。でも日本へ来てから日本語を一生懸命勉強したので、バスケットボールをやることができませんでした。貴校に入学したらバスケットボールをまたやりたいです。</p>
生徒 F	<p>2. 私は中学校2年の2学期から日本の中学校に入りました。まず日本語の勉強をしました。時間が短いので、集中して勉強しました。並行して教科の勉強も努力しました。</p> <p>最初、クラスに入ったとき、話が何もできなかつたです。給食や掃除の時間にクラスの人と話をし、だんだん会話ができるようになりました。私は中国にいた時、弱い人のことを考えたことがなかったけれども、日本に来たら、自分が言葉がわからないので、弱い立場になったことに気づきました、でもそのことで弱い立場の人の気持ちを考えるようになったと思います。これが中学校生活の中で、一番得たことです。</p>
生徒 G	<p>2. 僕は日本へ来たばかりの時、日本語が全くわかりませんでした。日本語学級で日本語を勉強しながら教室の授業についていくのは、とても大変でしたが、がんばりました。今では先生の話も友達の話もほとんど理解できるようになりました。</p> <p>また、日本へ来てから両親は仕事が忙しいので自分が毎日家族の料理を作るようになりました。いろいろなことを自分の力でやれるようになったことが、日本へ来てから僕が得たことです。</p>